

## ——日本ことわざ文化学会の一年を顧みて——

会長 森 洋子(明治大学名誉教授)



日本ことわざ文化学会は昨年 10 月に創設されました。したがって今回は、初めての記念すべき学会大会になります。設立にあたっては、伝承ことわざの文化史的な意味や創作ことわざの潜在力などを研究・発表し、積極的に社会にことわざを広めようという同志が集まりました。幸いにして、私たちの主旨に賛同する多くの学会入会者を得ることができました。本大会の開催にあたり、改めて学会の社会的な意味と使命を覚えます。

以下、この一年間の様々な学会活動についてご報告申し上げます。

### 【月例研究会「文殊の知恵」】

8 月の夏休みを除き、毎月、水準の高い研究会を開き、私たちは多くのことを学ぶことができました。学会員の研究発表以外にも、さまざまな専門領域の研究者、例えば、片岡徹也氏(戦史・用兵思想史研究家)、庄司和晃氏(教育学、大東文化大学名誉教授)、小室輝久氏(法律、明治大学准教授)が講演をしてくださいました。その要旨は学会のホームページ(「文殊の知恵」の記録)に掲載されています。

### 【展覧会と記念講演会】

明治大学、明治大学図書館・博物館、明治大学ことわざ学研究所、読売新聞社、文化村ザ・ミュージアムが主催し、本学会が後援した展覧会や講演会が開催されました。時田昌瑞会員のことわざコレクションが明治大学に寄贈されて以来(2008.5)、初めての大規模な展覧会「ことわざワールドへようこそ」が明治大学博物館、同図書館で開催されました(5/28-7/19)。これを記念し、時田会員は「美術文化としてのことわざ」、山口政信会員は「ことわざ教育の新思潮—模倣と創造を往還する創作ことわざ」と題した記念講演を同大学中央図書館で行いました(6/5)。

同大学アカデミーコモンでの森洋子の記念講演「現代に生きるブリューゲルの知恵—イメージ革命の先駆者」(7/19)は、東京渋谷の文化村ザ・ミュージアムで開催された「ブリューゲル版画の世界」(7/17-8/29)に関連するものです。なお展覧会において監修者・森は 150 点の出品作のうち、19 点のことわざ版画、2 点のことわざ素描を一室にまとめて展示し、16 世紀のフランドルで流布したことわざを紹介しました。

### 【出版活動】

11月上旬、日本ことわざ文化学会編『ことわざに聞く—その魅力と威力』(人間の科学新社)が上梓されました。穴田義孝会員が中心となって編集した本書の執筆者はすべて本学会員から構成されており、さまざまな分野(思想史、歴史学、教育学、社会心理学、仏教、スポーツ学、美術史、音楽教育など)での研究成果が所収されています。今後も学会員の研究成果を定期的に刊行できる企画を進めてゆきたいと思えます。

### 【専門研究部会】

時田会員が中心となり、外部の専門家も参加する研究活動「ことわざ国際比較プロジェクト」はすでに9回行われ、数年後の出版をめざしています。日本のことわざを軸に約20言語のことわざを比較、分析する研究会です。

### 【社会連携】

名古屋でのCOP10 パートナースhip事業として、エコ・ファースト推進協議会が全国の小学生、中学生を対象とする「生き物にかかわる『エコとわざ』コンクール」を実施しました。本学会は企画への助言および審査の監修をいたしました。約500点の創作ことわざが審査の対象になり、本学会の森、山口、時田会員が審査会に参加しました。表彰式で、本学会は日本ことわざ文化学会賞「くまをおうより森をそだてよ」(小3 湯川真有さん)、森洋子賞(個人賞)「僕らが守るよ!地球の未来」(小3 関 颯人さん)を授与しました。式典の行事のひとつとして、森は「ことわざを知る楽しみ、見る楽しみ—さまざまな生き物の世界から」と題した講演を行いました。

### 【今後の活動】

来春、小森英明会員が計画した文京区民プロデュース講座「ことわざアラカルト」において、学会員が講師を務めます。また山口会員が明治大学学部間共通総合講座で行っている「ことわざ学入門」では、来年も多くの学会員が講義を担当します。学生たちは半年間、「伝承ことわざの魅力」や「ことわざ創りの威力」などを楽しく学ぶことでしょう。

これからも社会と連携した多様な活動を展開したいと考えています。外国の研究者との密度の濃い交流も進められるよう、具体的な計画を立ててまいります。

初年度に本学会がこのような充実した学会活動を行うことができたのも、皆様のご活躍のお陰です。とりわけ事務局長の山口政信氏(明治大学教授)にはたいへんご尽力をいただき、心から感謝申し上げます。全国に明治大学時田コレクションの意義を伝えた時田昌瑞氏、出版を担当された穴田義孝氏(明治大学教授)、第一回学会大会の実行委員長小森英明氏(日本ケアプロヴァイダー協会代表理事)にもお礼を申し上げます。また学会員の皆様が積極的に例会に参加され、発言されたことはどんなに大きな推進の力となったことでしょうか。ありがとうございました。

## 「日本ことわざ文化学会」第1回大会プログラム

期日 2010年11月27日(土)

会場 明治大学 駿河台校舎 (研究棟2階 第9会議室)

### 〈タイムスケジュール〉

【受付】 10:30～

【総会】 11:00～12:00 ■司会:小森 英明

■開会の辞:森 洋子

■閉会の辞:木内 宣男

【個人研究発表】 13:00～15:00 ■座長:時田 昌瑞

研究発表 ① (13:00～13:30) ■発表者:石原 仁誌 題目「からだことわざーからだの部分・部位のついたことわざや慣用句」
研究発表 ② (13:30～14:00) ■発表者:伊藤 久恵 題目「絵双六に見ることわざ・格言ー庶民の教育観を探る」
研究発表 ③ (14:00～14:30) ■発表者:川島 洋 題目「ことわざ社会心理学への誘いー『いろはことわざ創り調査法』でみる若者の音楽観」
研究発表 ④ (14:30～15:00) ■発表者:Kate O' Callaghan 題目「Literal and Metaphoric Gaelic Food Proverbs : How They Reflect Societal Attitudes.」 (「ゲール語の食に関する逐語的・比喩的事ことわざーいかに社会を反映しているか」)

【シンポジウム】 15:15～17:45

テーマ「教育とことわざ」 ■司会:穴田 義孝

■パネリスト:西田 知己「寺子屋の教科書にみることわざ学習のヒント」

安藤 友子「ことわざと子ども」

庄司 和晃「コトワザ教育の推進」

山口 政信「〈ことわざを演じる〉という視座ーことわざの潜在力を拓く(ふり)」

【懇親会】 18:00～20:00 (研究棟4階 第3会議室)

## 〈プロフィール〉

### 【個人研究発表】

**座長:時田 昌瑞(ときた まさみず)**

ことわざの視覚表現に関心を持つ。『岩波ことわざ辞典』、『図説ことわざ事典』、『岩波いろはカルタ辞典』、『ことわざで遊ぶいろはかるた』、『ちびまる子ちゃんのことわざかるた』、他。

**発表者:石原 仁誌(いしはら ひとし)**

昭和 53 年 3 月神戸大学経済学部卒業。同年 4 月朝日生命保険相互会社入社。現在朝日不動産管理㈱へ出向中。平成 21 年 10 月より「日本ことわざ文化学会」発会と同時に会員。

**発表者:伊藤 久恵(いとう ひさえ)**

ESPミュージカルアカデミー講師。研究分野は、音楽教育学、教育心理学、コミュニケーション論。共著に『常識力を問いなおす 24 の視点』(文化書房博文社)がある。

**発表者:川島 洋(かわしま ひろし)**

明治大学大学院 博士前期課程。音楽家。専門領域は社会心理学、ポピュラー音楽研究。共著に『ことわざに聞く-その魅力と威力』日本ことわざ文化学会編(人間の科学新社)がある。

**発表者:Kate O' Callaghan(ケイト・オカラハン)**

琉球大学講師(英語担当)。アイルランド出身。母国語であるゲール語のユーモアやことわざに関心があり、アイルランドと日本のことわざの比較研究を視野に入れている。

### 【シンポジウム】

**司会:穴田 義孝(あなだ よしゆき)**

明治大学政治経済学部 教授。

編著に『ことわざDE社会心理学の探究』(文化書房博文社、2009)、他。

**パネリスト:西田 知己(にしだ とみみ)**

上智大学公開講座、清泉女子大学公開講座講師。寺子屋教育の視点から、江戸期のことわざ調査に取り組んでいる。主著に『こどもことわざ塾』(明治書院)がある。

**パネリスト:安藤 友子(あんどう ともこ)**

前中野区立啓明小学校 校長。30年間の教職の中で、子どもたちと「ことわざ」の学習を実践し、現在は若手教員の研修指導を担当。学校図書館教育で研究発表会を開催。

**パネリスト:庄司 和晃(しょうじ かずあき)**

大東文化大学名誉教授。1929年、山形県生まれ。日本大学宗教学科卒。専門は認識論。著書に『認識の三段階連関理論』(季節社)、『コトワザ教育と教育の知恵』(明治図書)。

**パネリスト:山口 政信(やまぐち まさのぶ)**

明治大学法学部教授。「現象学的スポーツ学」の立場から、「わざ言語」や「創作ことわざ」のメタ認知力に関心を寄せている。主著に『スポーツに言葉を』(遊戯社)がある。

## 研究発表①

## 「からだことわざーからだの部分・部位のついたことわざや慣用句」

石原 仁 誌

「英語では職業をさす場合、人(=マン)で形容していることが多い。例をあげるとポリスマン、ファイヤーマン、ポストマン、セールスマン、ステーツマン等である。一方日本語では職業や人を形容する場合の表現として『手』がよく使われている。歌手、売手、買手、やり手、苦手、得手等である。もちろん手以外も船頭・人足など他の部位で表現したことばもある。」山口先生と交わしたこのような会話の中で、「からだことば」と「からだことわざ」という表現も教えていただいた。「からだことわざ」とは、山口先生が作られた造語であるとの説明を受けたことを契機に、「手始め」に「手」のついた「ことわざ」や「慣用句」を調べてみようと思い立った。

職業にも手のつくことばが多いのは日本の場合、「手作業」、「手間賃」、「手取り」というように労働そのものが手仕事を中心に農作業の中で行なわれて来たことも影響しているであろうか。自分は農作業に従事したことはないが、長い間日本の文化において生活の糧であったお米、稲作は手で苗を植えて、腰をかがめて手で稲を刈り取り、千刃扱きで籾を取るといった情景が思い浮かぶ。

手を動かすことが全てといってもよく、今風に言えば農作業の高率アップのために、農繁期には「手早く」「いい手」を「手抜き無く」「手を尽くして」「押しの一挙」で「手がかり」「決め手」を「手さぐり」したものの「手に負えぬ」「お手上げだ」「人手がほしい」「猫の手」も借りたといった感じだったのであろうか。

実際に調べてみると「手」以外の体のいろいろの部分や部位の「ことわざ」や「慣用句」が多いことに驚いた次第である。「からだことば」は、からだの部分や部位を介して「生きる」という経験から生まれた共通語である。「ことわざ」は、民衆の知恵として人々の口から口へと伝えられながら人々の暮らしに寄り添って出来た言葉の芸術である。この両者が合体した「からだことわざ」、例えば「開いた口がふさがらぬ」「嘘と坊主の頭はゆったことがない」などの「ことわざ」や「慣用句」を紹介し、その存在意義について報告したい。

当学会は8月が休会であったため、自分の身近にある書物から「からだの部分や部位」のついた「ことわざ」や「慣用句」を探してみることにした。今の時代はご案内のように、インターネットを利用すれば、その種の類のことばはすぐに検索できるかもしれないが、あえてアナログに頼ることとした。具体的には当学会に参加するようになって目にした「ことわざ」の書物や事典の類のものである。特に学会加入後初めて目にした時田先生の「図説 ことわざ事典」は私の知らなかった、特に江戸時代に流布されるようになったと思われる「ことわざ」が数多く掲載されており興味を引かれた。そのような作業を経て、添付の「からだことわざ(からだの部分・部位のついたことわざや慣用句)」を作成した。添付の資料は、自分自身が備忘録としてまとめたものである。稚拙なまとめであるがこの内容をもとに報告したい。

備忘録を作成する際に、「ことわざ」と「慣用句」をどうするか迷い、広辞苑も紐解いたが、私の頭では今一つ理解できず、今回参考資料とした書物や事典に「ことわざ」として紹介してあるものを「ことわざ」に分類して、それ以外のことばを「慣用句」に分類した。

山口先生の著書「スポーツに言葉を」の中で、「からだことばの存在数」として一番多い「手」の101から一番少ない「胸」の21まで合計460という数字が掲載してあった。それを見た時はとても大きな数字と感じたが、今回この備忘録に掲載した「ことわざ」や「慣用句」は合計735で部位ごとにまとめた数字を巻末に掲載してある。ご参考願いたい。

さて、実際に「手はじめに」始めたこの作業であったが、次のいくつかのことに気がついた。

1. 「手」以外にもからだのいろいろな部位や部分のことばが使われているが、「目」「腹」「足」などの特定の部位のものはその数が多い。  
「目に入れても痛くない」「弱り目にたたり目」「腹が減っては戦が出来ぬ」「茶腹も一時」「足を棒にする」「二の足を踏む」などである。
  2. いくつかの部位を重ねたことばも相当数にのぼる。  
「笑顔にあたる拳なし」「目は口ほどにものを言う」などである。
  3. 江戸時代からの言い伝えと思われることわざにはこっけいな表現や上品とはいえない表現のものも見られる。  
「傾城の胸は嘘の入れ物」「出物腫れ物所嫌わず」「頭かくして尻隠さず」「灯明の火で尻あぶる」「女の尻で飯を食う」などである。
  4. 食べ物がかからむことわざはぼた餅、おはぎなど甘いもの系が多い。  
「開いた口へぼた餅」「開いた口へおはぎ」「あんころ餅でお尻をたたく」などである。
  5. だじゃれやリズムカルな言葉遊び的なものも多々見られる。  
「その手は桑名の焼き蛤」「げらげら笑いのどん腹たて」「ウンと頭をタテに振る」「焼餅焼くとて手を焼くな」「結構毛だらけ猫灰だらけ」などである。
  6. 中国の古い書物や歴史上の人物が言ったとされることわざもいくつかあった。別紙一覧では37のことわざを紹介している。  
「抱腹絶倒」「蓬蕩垢面」「耳順」「飛耳長目」などである。
  7. 当たり前であるが人生の教訓を意識した表現のものや、人としての道を教えたもの、生活の知恵を示唆したものが数多く見られた。  
「正直の頭に神宿る」「嘘をつくと閻魔様に舌を抜かれる」「人の口に戸は立たぬ」「腹八分目に医者いらず」「頭剃るより心を剃れ」「兄弟は両の手」などである。
- 最後に、今回新たに知りえた幾つかの「ことわざ」の中で私が一番気に入った「ことわざ」を披露して拙い発表を終えたい。それは「握れば拳開けば掌」である。このことわざをもう少し早くに知っていれば既に二人の息子が成人しているが、彼らとの接し方にももうすこし穏やかなものがあつたかもしれないと「目からうろこ」の気持ちである。

(添付資料) 別紙「からだことわざ(からだの部分・部位のついたことわざや慣用句)」

## 研究発表②

## 「絵双六に見ることわざ・格言―庶民の教育観を探る」

伊藤 久恵

## 1.はじめに

サイコロを振ってコマを進める遊び、双六は、現代では子どもの遊び道具という印象が強いが、江戸時代から明治時代にかけて作られた「絵双六」の多くは、子どもというより、むしろ大人向けに作られたものが多い。東海道の宿場や風景、歌舞伎役者の似顔絵、歌舞伎の舞台の様子、売れっ子芸妓の源氏名や店名、遊廓の夜の風景、日本各地の名所や名物、小間物屋で売っている化粧品の数々、江戸で評判になっている食べ物など、その題材を見ても、絵双六が大人向けに作られていたことがわかる。

絵双六に取り上げられた題材は、その当時に流行していた物や最先端の話題であることが多く、絵双六にはメディアとしての側面もあったことがわかる。それゆえ、絵双六は商品の宣伝広告として利用されたり、新しい物事を人々に周知する役割を担ったり(明治維新と共に導入された鉄道、電話、学校教育、衛生教育など)、ときには民衆の気持ちを煽る目的にも使われた。『日本絵双六集成』の編著者である高橋順二氏は、「絵双六は大衆文化の縮図」と述べ、絵双六には人々の教養、文化、娯楽、ときには政治批判までも描かれる、そして武士階級はもちろん、学者、商人、一般庶民に至るあらゆる人々の生活の様子、ものの考え方などが描き出されている、と絵双六を位置づけている。

本研究では、現存する絵双六の中から、教育的な題材が描かれたものに焦点をあて、その中に描かれる庶民の教育観に着目していく。庶民の遊び道具である双六を資料とすることで、国の教育政策に関する文献や公式文書等を資料とした研究とは、また違った角度から、庶民の教育観を見ることができるのではないかと考えている。

## 2.研究方法

本研究では、東京学芸大学附属図書館に所蔵されている「双六コレクション」(全 126 点)を中心として、現存する絵双六を資料とする。本大学の「双六コレクション」をメイン資料にした理由は、教員養成大学である本大学では、これらの双六が作られた時代の人々が、双六という遊びを通して、どのような事柄を学び、どのような文化を享受していたのかを知る貴重な教育資料として、本コレクションを位置づけているからである。

本研究では、(1)本大学の「双六コレクション」を中心とした 153 点の絵双六を閲覧し、その中から教育的な題材(ことわざ・格言が書かれているものを含む)のものを抽出し、(2)抽出した絵双六から読みとれる庶民の教育観について考察してみたいと思う。

### 3.考察

江戸・明治期に大量に作られた絵双六は、大人向けのものが多いため、子どもや若者を対象とした教育的な題材のものは、今回閲覧した絵双六 153 点中、46 点であった。江戸時代のものでは、「子どもの手習い(習字)」「古典教養のひとつの百人一首」「仏教の教え」「女性への教訓」「奥奉公の身分役職」「上流階級の女子の 12 ヶ月の礼式」「歴史上の有名なエピソード・武将の逸話による男子への教訓」「子どもに善悪を教えるもの」などがあり、明治時代になると、「学校教育に関するもの」「女性の新しい生き方」「男子の出世」などを題材としたものが出てくる。以下は、時代による教育観が顕著に表れている絵双六である。

#### ①『女今川教訓双六』(江戸時代、天保頃)

若い娘を教育するために書かれた江戸時代の小説、『婦女今川』の内容を絵双六にしたもの。「嫁しては夫に従え、朝寝坊はいけない、贅沢はいけない、外出はいけない、口ごたえはいけない、井戸端会議はいけない、嫉妬はいけない……」。書かれている内容のほとんどが、女性がしてはならない禁止事項である。この絵双六で遊びながら、当時の娘たちは女性としてのものの見方や考え方を身につけていったことがうかがえる。

#### ②『新双六淑女鑑』(明治 19 年)

女の子が生まれてから淑女になるまでの過程が描かれた絵双六。「勉強」という項目が登場し、女性の将来の進路として、様々な職業婦人(教員、著述家、宣教師、新聞記者、医師、音楽家など)が紹介されている。明治時代、日本に新しい教育制度が導入されたことで、女性に対する教育観が変わり、庶民レベルでの女性の生き方も変化したことがわかる。

#### ③『男子教育出世双六』(明治 23 年)

出世を題材にした絵双六。男子をどのように育てるか、男子一生において何を目標とすべきかが描かれている。「幼少より学問に志せば有名の人になります」という説明書きがあり、出世コースの様々なイベントが描かれる。最後は、国会議事堂で、「勉強して議員となり国のためをすべし」という訓示がある。勉学に励み、自分の努力次第では出世できるという内容で、江戸時代のように「武士は武士らしく」「奉公人は奉公人らしく」という生き方を「教育」によって変えることが可能だということを庶民に教える絵双六でもある。

#### ④『処世教訓漫画双六』(昭和 4 年)

「ことわざ」を使った人生教訓を題材にした絵双六。理想的な家庭を築くまでの人生経路が描かれ、その時々的人生の場面にふさわしい「ことわざ」が付けられている。経路は途中で 2 つに分かれ、「正道」と「邪道」のどちらを進むかによって人生も大きく異なる。「ことわざ」で人の一生が語れる、ということ改めて実感することができる絵双六でもある。

古くから「子どもは遊びながら成長する」と言われる。絵双六にも「遊びながら自然に学ばせる」という側面がある。この「学び」は、学校制度の導入によって合理的に知識を教える「教育」とは異なり、人と人とのやり取り(コミュニケーション)を通じた体験的な学びである。次世代への文化の伝承にも似た学びと言える。これは人から人へ伝える「ことわざ」も同じである。「ことわざ」がそのような学びを可能にする素材であることを再認識し、現代の学校教育を見直す意味においても、今後さらに「ことわざ」が教育現場で生かされることを期待したい。

## 研究発表③

# 「ことわざ社会心理学への誘い<sup>いざな</sup>」 —『いろはことわざ創り調査法』でみる若者の音楽観

川島 洋

■キーワード： 創作ことわざ、若者文化、若者ことば、アイデンティティ、コミュニケーション

## 1.はじめに

社会現象としての「音楽」を通して、現代日本社会における若者の心理、価値観、行動を知ることが本研究の大きなテーマである。また、その調査には穴田義孝(明治大学教授)が提唱する「いろはことわざ創り調査法」を使い、その有効性を実証することも、本研究の一つのテーマである。

社会心理学において、一般的に用いられる実験法や質問紙調査法等の調査法をあえて使用せず、「いろはことわざ創り調査法」を用いることで、これまでの若者と音楽に関する研究(調査法)では見出すことができなかった若者の価値観や行動、あるいは現代の若者文化を明らかにできるのではないかと考える。

## 2.方法と分類

「いろはことわざ創り調査法」とは、特定のテーマを決め、一人一人がそのテーマに関する「ことわざ」、あるいは「ことわざ的な短めの文章」をいろはカルタのように「い、ろ、は、…」を頭文字として44句創り、その創られたことわざをデータとして分析を行う調査法である。

今回、分析・考察する「いろはことわざ創り調査法」(テーマ:音楽)によるデータは、2009年8月に、東京都にある某音楽専門学校に通う学生102人(音楽業界に就職することを目的とした学科の1年生、男性16人、女性86人、年齢:18歳~20歳)によって創られたものである。1人が44句のことわざを創るので102人×44句で、計4488句の創作ことわざが得られることになる。創られたことわざは、内容ごとに、次のように7カテゴリー20項目に分類し、分析・考察を行った。(※以下の項目にある数字は、分類されたことわざの項目ごとの頻度を示す)

(一)主観・客観: (1)自分の感想・意見(主観的内容)(3282句)、(2)事実・状況(客観的内容)(1008句)、(二)価値観・好き嫌い: (3)音楽に対する意見・状況(1006句)、(4)特定のアーティスト・音楽ジャンル・曲などに関しての意見・感想・事実(1774句)、(5)好意的内容(1489句)、(6)教訓的内容(90句)、(7)批判的内容(190句)、(8)悲観的内容(142句)、(9)疑問(69句)、(三)夢・希望、恋愛: (10)自身の夢や希望(271句)、(11)恋愛、思い出(97句)、(四)体験・行動: (12)体験・行動的内容(689句)、(13)ライブに関すること(体験・意見)(548句)、(五)音楽の力: (14)音楽の必要性(459句)、(15)音楽の力(癒される・助けられる・支えられる等)(212句)、(16)平和・友好(101句)、(六)特定の言葉を使用したこ

とわざ: (17) 音楽のジャンル(445 句)、(18) 隠語・専門用語、若者言葉(162 句)、(七)その他: (19) サウンドスケープ(音風景)に関することわざ(27 句)、(20) 意味不明(98 句)

### 3.分析と結果

- (一) **主観・客観:** 価値観や心理を探るためには、主観的に一人称で創られたことわざの方がデータとしての有効性が高いといえる。今回の調査で創られたことわざは、主観的内容が客観的内容の3分の2以上あり、社会心理を知るためのデータとしての有効性は十分あると考えていいだろう。
- (二) **価値観・好き嫌い:** 音楽に対して好意的なことわざが多く、音楽そのものを語ることわざよりも、多くの人が特定のアーティストやバンドについて語っている。音楽に対する価値観を形作っているファン心理がそのまま反映されていると考えられる。
- (三) **夢・希望、恋愛:** 音楽を通して夢や希望を語ったことわざは、身近な夢から、将来の夢を具体的に語ったものまで様々であるが、その多くは前向きなものである。恋愛と音楽について語ったことわざは、さほど多くはなかったが、思春期の恋愛と音楽との関係性を考える上では有効なデータになり得ると考える。
- (四) **体験・行動:** 音楽体験や行動について書かれたことわざのほとんどが、ライブに関わるものである。多くの若者にとって音楽とは聴くだけのものではなく体感するものであることがわかる。これらのことは、人々が音楽を共有することで生まれる社会的機能(連帯感)との関連性をうかがわせるものでもある。
- (五) **音楽の力:** 多くの若者達が音楽の力に癒され、音楽を精神的な支えとしていることがわかる。これは思春期におけるアイデンティティとの関係が考えられる。
- (六) **特定の言葉を使用したことわざ:** 音楽ジャンル、カテゴリーの細分化が進んでいること、隠語や若者ことばを知ることができる。
- (七) **その他:** サウンドスケープ(音風景)に関することわざからは、現代の若者の音楽観というよりも、日本人の音感覚が見てとれるだろう。

### 4.まとめ

いくつかの項目から答えを選ぶ質問紙調査法とは違い、調査対象者が直接ことわざを創るからこそ、現在の若者達の行動や価値観、あるいは若者ことばや隠語といった生きたことばを知ることができる。これが「いろはことわざ創り調査法」の特徴であるといえるだろう。

「いろはことわざ創り調査法」で創られたことわざは、特定のテーマに関して、短めの文章を書くという意味では、質問紙調査法の自由回答欄や文章完成法テストの回答と似ているともいえる。しかし、ここでことわざ的なものにこだわる理由は、遊びの側面を持つことわざというものを使って(しかも五・七・五といった形式や文法に縛られることなく)、自由な回答をしてもらうためである。遊び心をもって、楽しみながらことわざ創りをしてもらうことで、より調査対象者の本音や暗黙知を引き出すことができるのではないかと考えている。

このような、ことわざが持つ特徴を生かして、人や社会を知ろうというのが「いろはことわざ創り調査法」であり、ことわざ社会心理学なのである。

研究発表④

## 「Literal and Metaphoric Gaelic Food Proverbs : How They Reflect Societal Attitudes.」

「ゲール語の食に関する逐語的・比喩のことわざ  
—いかに社会を反映しているか」

Kate O'Callaghan  
(ケイト・オカラハン)

When it comes to food, Ireland does not rank highly among the world's cuisines. On the contrary when food and Ireland are mentioned together, it is more likely hunger and the potato famine of the 1840's that spring to mind. Ireland has a long history of being occupied by foreign powers. This relegated the native to laboring on the land. Food went to the masters, market and then the family table. When external factors didn't cooperate the harvest yielded less for the workers. Having a long agricultural history the food found in the Irish household is simple and basic. Not a lot of condiments and spices are added and ingredients in traditional dishes were often cooked together at length so their flavours would enhance each other. Many of the menu items in now fashionable restaurants specializing in Irish food were actually born out of necessity rather than combined for taste or appearance. This paper will examine Gaelic proverbs that pertain specifically to food. The research question is: Do the attitudes revealed in modern Irish food related proverbs reflect the society they were born in?

【日本語訳】

食の話になるとアイルランドは世界の料理の中においては上位に入らない。一方、食とアイルランドとが一緒に言及されると、おそらく 1840 年代の飢えとジャガイモ飢饉が思い浮かぶであろう。アイルランドは長期にわたり外国勢力に占領された歴史をもつ。そのため先住民は畑での労働に追いやられていた。食べ物は領主、市場、そして家庭の食卓の順で渡った。外的要因により不作に見舞われると労働者への収穫量は減ってしまった。長い農業の歴史をもつアイルランドの家庭にみられる料理はシンプルかつベーシックである。調味料やスパイスはあまり使われておらず、伝統的料理に使われる材料は互いの味を引き立て合うように長時間一緒に火にかけられることが多かった。今日アイルランド料理を専門とする流行のレストランにあるメニューは、実は味や見た目よりも必要に迫られて産まれたものなのである。本論文は特に食に関連したゲール語のことわざについて考察する。本論文は「現代のアイルランドの食に関することわざに現れる姿勢は、ことわざが産まれた社会を反映しているか」を論題としている。

(翻訳:湯浅有紀子)

シンポジウム

## シンポジウム

# テーマ「教育とことわざ」

司会: 穴田 義孝

このたび、当学会編『ことわざに聞く—その魅力と威力』(人間の科学新社)が、出版されました。この本の「序論」(拙者担当)は、次のような書き出しで始まります。

「日本ことわざ文化学会は、“ことわざ”に関心のある様々な分野の人々が集う広場として2009年10月に創設されました。そして創設一周年を迎えるにあたり、ことわざに潜む魅力(charm)や意外な威力(power)を見直すために本書を刊行することにいたしました。

ところで、拙者がことわざに関心をもって以来、なるほどと感銘を受けた文章があります。御木光治『類別ことわざ辞典』(文進堂、1981)の〈はじめに〉の文章です。

— <ことわざは、一人がいい出し、二人でうなずき、千人が使い、万人がなるほど、と受け取って、長い年月、多くの人々の間に生きてきた教え、戒め、あてこすりなどをふくんだ、短い文句である>と、いわれている。これを定義である、といえば、まことにかた苦しい感じをうけるが、とにかく、要を得て簡にその意をついて妙である。

くらしの中に、滲み透り、こびりついて、いつまでも、どこでも、あたりかまわず、お互いの話の中に、ひよいと飛び出して来て、潤い、あや、穴うめ、のつとめを果たし、なるほど、そうだ、うまい、もつとだ、と感嘆、合点、共感をさせる力をもっている。

ここに、ことわざの渋み、こく、滋味がひそみ、それが、持ち味として考えられるのではなからうか。後略 —

本書のタイトルは、『ことわざに聞く—その魅力と威力』としました。そして、上記の引用文は、“ことわざ”が大いなる魅力と多大なる威力を秘めていることを示唆しているものと考えます。

そして次の文章で、締めくくっております。

「こうした魅力と威力を、実際は様々な教育・研究分野の本学会員が、それぞれ独自の切り口や研究方法で執筆していますが、読者の皆様の視点からは、それぞれが扱っていることわざに耳を傾けてみることで、“ことわざ”の魅力と威力を感じ取っていただければ幸いと存じます」。

本シンポジウムでは、このように“ことわざ”に耳を傾けていただくだけではなく、四人の本書の執筆者に直接「ことわざの魅力と威力」の一側面としての「教育とことわざ」に関する魅力と威力を引き出していただきたいと存じます。

## 「寺子屋の教科書にみることわざ学習のヒント」

パネリスト:西田 知己

### 1. 故事・説話とことわざ

江戸時代に刊行された膨大な教科書や事典類には、古くから伝わる故事や説話などがよく紹介されている。その本文にそえられた解説文にことわざを使い、物語の顛末をコンパクトにまとめていることも多い。その組み合わせをことわざの側からとらえると、手前に置かれた物語がことわざの「例文」になっているようにも受け取れる。

いっぽう現在、おもに学習参考書としてまとめられたことわざの本では、ことわざの項目ごとに創作のショートストーリーや4コマ漫画などが載せられている。描かれた内容の多くは、日常生活のひとコマとなる出来事や人間模様となっている。ことわざの使い道を理解するには有効で、各著作のカラーを打ち出しやすい部分でもある。それでも創作のためか、一般的には覚えるべき事柄には含まれていない。その点、上述した江戸期の「例文」は、それ自体がことわざと別に読み聞かされるなどして学習されていた物語だった。

いにしへの物語とことわざの組み合わせは、必ずしも確定されたペアが決まっていたわけではなく、具体例な取り合わせの中には若干の出来不出来がある。それでも巧みに組み合わせられたタイプは、今なお教材として通用すると考えられる。

### 2. ビジュアル文化と書物

江戸時代に開花した大衆文化として名高い歌舞伎は、元禄期にひとつの頂点を迎えた。その歌舞伎については、リアルな芝居を特色とする上方(京阪地方)の「実事」と、豪快なアクションを取り入れた江戸の「荒事」との対比が指摘されている。京言葉の伝統が長い上方では、地元の言葉を舞台上でそのまま使うことができ、実生活に密着した写実的な芝居が成り立った。対する江戸は地方出身者の流入が進んで大都市になり、伝統的な武士言葉のほかにも多様な方言が入り乱れ、生活言語によるきめ細かい芝居が成り立ちにくかった。そのため、大きな動きで魅せる趣向が発達したとされている。

たとえば出版の領域では元禄期のころから、伝統的な狂言の台本が絵入りで刊行されるようになってきている。台本を物語として読もうとするニーズのあらわれ、といってもよい。江戸時代における書物のビジュアル化については、寺子屋の教科書にも当てはまる。本来は素読用だった教科書(『実語教』や『童子教』など)でさえ、各フレーズごとにワンカットそえた絵入り本も多く刊行されるようになっていった。ビジュアル重視の流れは、上方でも江戸でも同様の展開をたどっている。

### 3. 絵がるたの学習効果

戦国期に西洋からカードがもたらされ、それがひとつの契機となって江戸時代にかるたの文化が栄えた。百人一首が歌がるたになり、絵入りで出回るようになったのは、ひとつの先例になっている。元禄期の頃にはかるたとことわざが組み合わせられているいろはかるたが成立し、世の中に広く受け入れられた。教科書や事典類でも、いろはかるたをそのまま絵入りで並べたものを見かける。これは、ことわざの視覚化ともいえる推移だった。

こうして子どもにも親しみやすい絵入りのスタイルでことわざが紹介されるようになり、多大な学習効果が生まれたと考えられる。そのアイデアは、現在の学習参考書にも引き継がれている。そこに江戸時代的な「例文」を加味することができれば、さらなる効果が派生するのではないだろうか。

シンポジウム

## 「ことわざと子ども」

パネリスト:安藤友子

ことわざは、時を超え人を超えながら、人をつなぎ人を励まし勇気を与える不思議な力をもっています。

私が、ことわざに魅せられたのは、今から20年ほど前に担任をした子どもたちとの出会いからだったと思います。

当時、私は、本会会員の時田昌瑞氏と同じ学校に勤務していました。5年生の担任をしていたとき、時田さんに繰り返しお願いをして、子どもたちに「ことわざ」の授業をしていただきました。子どもたちは、専門的で大学の講義のような時田氏の話を食い入るように聞いています。授業が終わって、子どもたちに感想を聞くと、「とても面白かった」「ことわざに興味をもった」という内容が多く驚きました。子どもたちは、本物が伝える力を受け止めたのだと感じました。

そして、2年後に異動した調布市の小学校で6年生の担任となり、いよいよことわざの実践をする機会を得ました。

### 《 ことわざ遊びをしよう 》

夏休みが終わって間もない頃、4月以来毎日発行していた学級通信「握手」第100号で、「蒔かぬ種は生えぬ」とばかり、「ことわざ遊び」を投げかけ、翌日から、「毎朝、一人一つ、ことわざ集め」の取組を始めました。

以下は、学級通信「握手」でことわざを取り上げた日の記録です。

○「握手」100号(9月12日) ことわざ遊びをしよう

○「握手」124号(10月14日) ことわざ500達成の日

○「握手」138号(10月30日) 創作ことわざ

子どもたちが創ったことわざ 「ドンマイは心のゆとり」 「努力のかたまりは、成功のもと」
---

○「握手」156号(11月22日) ことわざ1188達成

○「握手」173号(12月13日) ことわざは友達、ことわざ2101達成

### 《 ことわざ遊びから18年後 》

子どもたちが小学校を卒業してから18年後、私の定年退職を祝って、6年1組の子どもたちが「クラス会」をしてくれました。すっかり立派になった子どもたちと思い出話をしていたとき、「なあ、ことわざやったよなあ」「ことわざのトンネルできたよねえ」と、子どもたちが言い出しました。

「ことわざ遊び」は、時を経て、いよいよ私たちのきずなを深め、30代になった「6年1組」の文化になったかも知れないと思っています。

## 「コトワザ教育の推進」

パネリスト: 庄 司 和 晃

**(1) 教育の本質は、渡世法体得に存する。**

誰も彼も、この世を渡っていく。昔も今も。その長い間に、多くのコトワザを結晶させつつ、今日に到っている。

**(2) コトワザの本質は、感性的論理の発見にある。**

鬼に金棒、棚から牡丹餅、のごとく。  
物や事をつかって理屈をつくる考え方。  
つまり、感性の保存された論理。  
それが、知恵となり教訓にもなっていく。  
諺「論理」観と諺「教訓」観について。

**(3) コトワザとは何か。**

定義—自立した短文句。<sup>たんもんく</sup>  
特徴—萌芽的イデオロギー・前科学的成果・鑑賞性を宿す実用言語。

**(4) コトワザの周辺文化。**

知識コトワザ(気象・農学・兆占禁呪…)  
思想コトワザ(弁証法・人間学…)  
遊びコトワザ(修辞・言葉遊び・呪文…)

**(5) コトワザ教育の目的。**

感性的論理を身につける。(コトワザ交り文作り・創作コトワザ)  
抽象化と具体化の行使力。(コトワザ一個の構造作り)

**(6) コトワザの間接教育。**

法則作り(身の必然性の発見)  
比喩作り(明喩と暗喩)  
呼び名作り(草や虫など。方言の話)  
謎々をものはずけ(その話と創作)  
聞き做し(話と創作)<sup>な</sup>  
ハゲマシ俗信とオドカシ俗信(創作)  
呪文作り(話と創作)  
一言作り(言い切る。とは思考法)  
認識ののぼりおりとキッカケ言葉。

**(7) 伝承コトワザの教育。**

江戸いろはと上方いろは。

コトワザの三大分類(知識・思想・遊び)

コトワザの面白さ(類諺・対諺・短くなる・長くなる、そして創作)

コトワザ学概論(定義・本質・特徴・数と流れ込み・分類・成立・位置・構造・裏表・使用法・限界面・周辺文化・前科学的成果・認識発展論と表象レベルの作品、など)

しごと(好きなコトワザ・嫌いなコトワザ・知っているコトワザ・薦めたいコトワザ・気をつけたいコトワザ・コトワザとは何か・コトワザ全体をたとえたらどうなるか・コトワザ集め、など)

コトワザ交り文作り(三個使うとか)

コトワザ教育の歴史(昔と今)

**(8) 創作コトワザの実践。**

自由創作法(例提示式・勝手次第)

テーマ設定法(子どもについて、とか)

型はめ創作法(○より△・○と△は□)

もじり創作法・引用創作法、など。

**(9) 絵ときコトワザの実践。**

絵になったコトワザを楽しむ。

コトワザを絵にする。

表の世界をそのまま(絵説き)

裏の世界を押し出す(絵解き)

抽象的なものをどう絵にするか。

絵とき文化の話。

**(10) 今後にやりたいこと。**

まず、テキスト化をはかりたい。

中・高での教育実践も進めたい。

そして、実践事例集を作りたい。

シンポジウム

## 「〈ことわざを演じる〉という視座—ことわざの潜在力を拓く〈ふり〉」

パネリスト: 山口 政 信

### 1.“ことわざ”の潜在力を拓く

「この国には何でもある。ないのは夢と希望だけである」といわれる昨今、私たちはことわざを介して、どのような貢献ができるのであろうか。

今日は、〈ことわざを演じる〉という視座をもって夢と希望の一端を披露したい。

(1) 伝承ことわざの研究…発掘・解釈

(2) 伝承ことわざを素材とした研究・教育

① 伝承ことわざの比較・学際領域

② 伝承ことわざのもじり創作

(3) 〈わざ〉…「技・妓、伎、技芸、業、態」

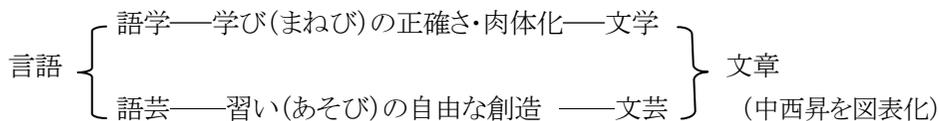
〈ことわざ〉…「言事・言技・事業・事態(芸:『風姿花伝』)」

⇒言動(ことばと行動との緊密な関係性) = …わざ言語(craft language)

(4) カルタ創作、絵図・立体物創作、etc.

(5) 「ふり」創作 ⇔ 俳優(わざをき) = 舞—振り—振る舞い ⇔ 実生活

### 2. 語芸・文芸としての“ことわざ”



(文学=文章の学、語芸=ことばの芸・ことば遊び。cf: 話芸)

### 3.“ことわざ”を拓く「ふり」

「ふり」とは意思の下に行った創造行為で、その原初には神聖行為があった。ことばやからだを用いた表現行為の総体(ゲシュタルト)である「ふり」は、新たに生成する行為が加わることによって変容を重ねつつ、様式化して伝承されてきた。

シャーマニズムに由来する「ふり」は、演劇術(俳優の訓練法)に援用されている。この意味において、シャーマンは記紀にいう俳優(わざをき)であり、シャーマンが発する比喩的表現が〈ことわざ〉とされ、今にいう「わざ言語」にも通底している。

「わざ言語」は、演劇だけではなくスポーツなどの「わざ」を極めんとするあらゆる世界に息づき、ことわざへと昇華する可能性を有している。よって、伝承ことわざであれ、創作ことわざであれ、「ふり」としての〈ことわざを演じる＝呼吸する〉ことにより、〈ことわざを生き、自己の生を創造する〉ことができるはずである。

ことわざには多くの動物が登場し、俳優の初歩的な訓練法の一つにも〈動物になる〉というものがある。動物を共通点とした舞台を設え、ことわざを演じることが、ことわざの系統立った概念を拓く一つの契機になることは間違いない。

抽象的な句はさて置くとして、まずは「猿も木から落ちる」といった、具象性が高い動物ことわざを演じることから始めたい。《猿のふりして我がふり直す》というではないか。

# 日本ことわざ文化学会会則

## 第1章 総則

### 第1条

本学会は、日本ことわざ文化学会(英文名Japanese Society of Paremiology <JSP>)と称する。

### 第2条

本学会の事務局は、原則として事務局長の所属する研究機関などに置く。

## 第2章 目的

### 第3条

本学会は、ことわざ学とこれに関連する領域の学際的研究を推進し、かつ内外の個人および関連団体と協力し、斯学の発展に寄与することを目的とする。

### 第4条

本学会は、前条の目的を達成するために、次の活動を行う。

1. 年次大会の開催。
2. 月例研究会「文殊の知恵」、ワークショップ、講演会などの開催。
3. 学会誌および会報などの発行。
4. 国内外の個人および関連団体との連携協力。
5. 各種教育機関との連携協力。
6. ことわざに関連する研究、活動を通じての社会貢献。
7. 各種関連機関への学会代表・要員などの推薦。
8. その他、本会の目的を達成するために必要と認められる活動。

## 第3章 会員

### 第5条

1. 本学会は、ことわざ学の研究者および本学会の趣旨に賛同する個人、機関をもって組織する。
2. 入会には、所定の手続きおよび理事会の承認を必要とする。
3. 会員構成は、次の通りとする。
  - (1) 普通会員。一般と院生・学生。
  - (2) 賛助会員。普通会員以外で、本学会の目的、活動に賛同する個人および法人。
  - (3) 招待会員。本学会の発展に寄与する個人および法人。
  - (4) 名誉会員。本学会の発展に貢献のある個人。
4. 入会金・会費の変更は、総会の議決による。
5. 退会は、次の通りとする。
  - (1) 本人の申し出による場合。
  - (2) 長期にわたり会費を滞納した場合。
  - (3) 理事会で退会が相当とみなした場合。

## 第6条

本学会会員は、次の義務と権利を有する。

1. 本学会設立の趣旨と目的を理解し、学会の発展とことわざの保存、普及、研究に貢献する。
2. 学会誌・会報などの配布、学会の活動・事業の案内を受け、研究成果を発表することができる。
3. 会費を毎会計年度末までに納入する。
4. 名誉会員、招待会員は、会費免除の特典を有する。

## 第4章 役員

### 第7条

本学会に次の役員を置く。

1. 会長1名、 2. 副会長1名、 3. 事務局長1名、 4. 理事 若干名、 5. 会計監査2名

### 第8条

本学会役員の任務を次のように定める。

1. 会長は、本学会を代表し、会務を統括する。
2. 副会長は、会長の会務を補佐する。
3. 事務局長は、事務局を統括する。
4. 理事は、本学会の運営にあたる。
5. 会計監査は、会計を監査する。

### 第9条

本学会役員の選出方法および任期を次のように定める。

1. 理事は、会員の推薦者を候補とし、総会で選出される。任期は2年とし、再選を妨げない。
2. 会長は、理事の互選による。任期は2年とし、再選を妨げない。
3. 副会長は、理事の互選による。任期は2年とし、再選を妨げない。
4. 事務局長は、理事の互選による。任期は2年とし、再選を妨げない。
5. 会計監査は、理事会で推薦し、総会で選出される。任期は2年とし、再選を妨げない。
6. 補充等による新任理事の任期は1年とし、再選を妨げない。
7. 会長、副会長、事務局長に欠員がある場合は、理事会で選任し、総会にて報告する。任期は前任者の残任期間とする。
8. 会計監査に欠員がある場合は、理事会で選任し、総会にて報告する。本件が初年度の場合、次年度については総会で承認を得る。任期は前任者の残任期間とする。

## 第5章 組織

### 第10条

1. 総会は、本学会最高の議決機関であり、毎年1回会長がこれを招集する。ただし会長は、必要に応じて臨時総会を招集することができる。
2. 総会は、理事会によって指名された議長主宰のもとに、役員の選出、活動の方針、予算・決算など、会務の重要事項を審議する。
3. 総会の議決は、出席会員の過半数による。

### 第 11 条

1. 理事会は、本学会諸規約および総会の議に則り、本学会の運営に関わる重要事項の審議決定にあたる。
2. 理事会は、会長が随時これを招集する。
3. 理事会の議決は、理事の過半数による。

### 第 12 条

1. 事務局は、理事会の議決にしたがい、本学会の会務を執行する。
2. 事務局に、若干名の事務局員を置くことができる。事務局員の選任は事務局長が行い、理事会に報告する。

## 第6章 会計

### 第 13 条

1. 本学会の経費は、会員の会費、補助金、寄付金などをもってあてる。
2. 入会金、年会費の額は、別途定める。

### 第 14 条

本学会の会計年度は、10月1日から翌年の9月30日までとする。

### 第 15 条

本学会の会計報告ならびに監査報告は、毎年1回、総会で行う。

## 第7章 会則の改廃

### 第 16 条

本学会会則の改廃は、理事会の議を経て、総会の議決による。

### 付則

本学会会則は2009年12月19日から施行する。

